

れた 12 例では TAE 後約 1 週間で FT_3 は有意に低下し、他方、 rT_3 と TSH は有意に上昇、 FT_4 は著変なく、 FT_3 と rT_3 との間の reciprocal な関係が示唆された。

8. I-131 MIBG による副腎描出の検討

塚本江利子 伊藤 和夫 中畝 邦博
加藤千恵次 永尾 一彦 古舘 正從
(北大・核)

I-131 MIBG の副腎髓質の描出について検討した。対象は、正常副腎をもつ 43 例と副腎髓質過形成の 1 例である。静注後 72 時間のイメージ上、視覚的に副腎の描出を Grade 0 から Grade 3 までに分けて評価したが、正常副腎は 43 例中 17 例 (37.4%) に Grade 1 または Grade 2 の描出を認め、副腎過形成では Grade 2 の描出を認めた。CT で深さを測定し得た 9 例で、コンピュータ画面上に ROI をとり、算出された正常の左副腎の %Uptake は、 $Mean \pm 2SD$ で $0.048 \pm 0.027\%$ であった。これに対し、副腎髓質過形成の %Uptake は、0.055% と正常副腎と差がなく、イメージ上、これらを鑑別するのは難しいと思われた。また、副腎描出に影響を与える因子について調べたが、正常副腎の描出される症例では、そうでない症例に対し、尿中エピネフリンが有意に高かった。

9. ^{131}I -MIBG にて集積を示さなかった Paraganglioma の一例

吉岡 邦浩 加藤 邦彦 広瀬 敦男
高橋 恒男 柳澤 融 (岩手医大・放)

^{131}I -MIBG シンチグラフィーで集積を示さなかった左側頭下窩のノルアドレナリン分泌性の paraganglioma の 1 例を経験した。

^{131}I -MIBG が施行された頭頸部の paraganglioma は、われわれが知る限りでは、9 例の報告がある。そのうち集積がみられたものは 6 例であった。また、この 9 例をカテコールアミンの分泌性の有無で分類すると、非分泌性のものは 4 例で、その全てに集積がみられたのに対して、分泌性のものは 5 例中 2 例にしか集積がみられず、分泌性の paraganglioma の方が陽性率が低いという興味ある傾向がみられた。この原因としては、現在までに

考えられているもののうち、腫瘍のカテコールアミンの rapid turnover とノルアドレナリンとの取り込みの競合が推測された。また、頭頸部の paraganglia には、種々のエステラーゼや neuropeptide が存在するため、これらも集積低下の一因となり得ると思われた。

10. 褐色細胞腫の診断における I-131 MIBG シンチの臨床的意義

樋口 正一 小田野幾雄 清野 泰之
木村 元政 酒井 邦夫 (新潟大・放)
武田 正之 (同・泌)

昭和 60 年 1 月から 63 年 4 月までの 3 年 3 か月間に褐色細胞腫が疑われた 54 例に I-131 MIBG シンチを施行した。そのうち組織学的に褐色細胞腫の確定診断が得られたものは 15 例 (16 病巣) あった。これらのうち I-131 MIBG シンチで有意な集積がみられたものは、良性褐色細胞腫の副腎原発では 9 病巣中 7 病巣、副腎外原発では 4 病巣中 3 病巣であった。また、悪性褐色細胞腫の 3 原発巣には全て集積がみられた。この結果、検出率は 81% であった。CT では全病巣が描出されており、病変の検出には CT が優れていたが、I-131 MIBG では偽陽性例はなく、その疾患特異性は 100% で、褐色細胞腫の診断に有用であった。

11. 心筋梗塞後心室瘤症例の血栓検索の検討—— ^{111}In -oxine 血栓シンチグラフィーを用いて——

津田 隆俊 久保田昌宏 高橋貞一郎
森田 和夫 (札幌医大・放)

心筋梗塞後心室瘤を持つ 17 例を対象に心腔内血栓検索を行い、他の方法との比較において、その特性を検討した。対象 17 例のうち、血栓 scan で陽性の 8 case は心エコー法 (UCG) または左室造影法 (LVG) にても左室内血栓を認め、6 case は UCG または LVG にて陽性で、血小板 scan では陰性であった。これらのことから、血小板 scan では、現在成育を続ける活性化血栓のみを検出し得、器質化血栓では陽性となり得ないことが考えられた。左室内血栓の機序については種々の説がとなえられ、一定の見解はない。血小板 scan で positive 群と negative 群で、LVEF と発作から同検査までの期間に関